

# ホメロスの競技

阿部正臣

## 序

我々が知る限り、ギリシアは古代に於いて唯一の競技国家である。今日使用されている英語の Athlete (競技者) という語と、それが表わす理念は我々がギリシア人から負うたものである。これは我々が競技として述べるところの色々なスポーツやゲームを作り上げたという意味ではない。遊戯に対する愛好はあらゆる若いものにとって普遍的なもので、走る、跳ぶ、物を投げる、闘うということは何時、如何なる民族に於いても共通して行なわれている。しかし、遊戯本能は確かに競技的な動機の一つを持っているけれど、遊戯は競技ではない。それはレクリエーションとして重要な要素を持っている。子供は遊びに飽きたり疲れたりすると遊ぶことを止めるが、レースに於ける競技者は疲れても疲労が極限に達するまで行ない続け、しかも全力を尽すために絶えず努力し、苦しく骨の折れる練習さえ行なう。何故、人間はこれを行なおうとするのか。何故、人間は当然苦しいものを楽しもうとするのか。

努力するという概念が競技の本質であることは、我々がその言葉を解するようにギリシア人も解していた。これはギリシア語に由来する競技者、Athlete という語に受け継がれている。この語はギリシア語に於いて常に競争を意味する男性語 Athlos と競争の賞品を表わす中性語 Athlon の二つの語形を持っているが、試合の概念は由来する言葉の意味によって決定されるものであるから、これらの初原始的な二つの意味の中にその概念が含まれていることは明らかである。それは10年間のトロイ戦争の模様を描いたホメロスによって使用され、ヘラクレスの労役にも使用されているが、「競争する」「奪闘する」という意味から「苦しく骨の折れる」「苛酷な」という形容語 Athlios にはっきりと変わり、さらにホメロスは戦争や戦いの悲痛な場面を表わす形容詞としてボクシングやレスリングの語を用いている。しかしながら、ホメロスの戦士達は苛酷な試合を楽しみ、ピンダロスは「労苦と犠牲を楽しむ人」と競技者と定義し、我々もまた同じような感情を持っているのである。

しかし、何故、競技者は苦しく骨の折れる試合を楽しみ、何故、苛酷な競技を楽しもうとするのか。競技者は何かを求めて争うものであるが明らかに競技者を引きつけるものは物質的に価値のある賞品ではない。ギリシア世界でもその賞品は手芸に長じ

## ホメロスの競技

た婦人、雄牛、鼎などということもあったけれど、最も彼らが切望した賞品はオリンピック競技で唯一の賞品であった野生オリーブの葉冠である。実際の賞品は勝利に対する名誉であり、努力を楽しみに向ける動機は自己の体力を試したいという欲求と、他人より秀い出たいという欲求のためであった。努力して競争を楽しむという感情は如何なる人でも如何なる民族でも持っていたが、競技の精神は生活状態が温和で充ち足りた社会には生まれにくいし、また身体のエネルギーが人間と人間の闘争や自然の挑戦に絶えず消耗するところの社会にも生まれない。それは身体の卓越性に高い価値を置いた身体的に活発な強壯国家にのみ生じ、武力と体力によって権力を維持する貴族社会に自然と湧き起こるものである。ここには闘争愛と名誉愛が発達し、青少年の訓練と戦士達のレクリエーションとなったレスリングやボクシングなどの格技型の競技が芽ばえてくるのである。恐らくホメロスのアカイア人や中部ヨーロッパの種族達はこうした状態にあったと思われる。

## ホメロスの競技

イリアス・23巻の葬送競技の叙述は現存するスポーツ記事の中で世界最古のものである。そのホメロスの作品で出てくるアカイアの戦士達はスポーツを全く楽しむというだけでなく、真のスポーツ精神を持った競技者である。そこにはベストを尽し、他人より秀い出たという欲求、努力する楽しみを見出すことができる。

ホメロスの作品に関する著作者とその年代に関しては色々と異論があるが、ここでは論じるつもりはない。多くの権威者達はBC9世紀以前には遡らないとし、作品に描かれている社会状況は少なくともそれより2、3世紀前に存在していたということに意見が一致している。作品の中に出てくる美しい髪を持ったアカイア人人はギリシアの原住民でなく、恐らく中部ヨーロッパからギリシアに南下して来た民族であろう。BC2000年以前に頑強な北方民族が中部ヨーロッパの平原を通して流域ずたいに山岳を越えて南下して来た。あるものは海峡を渡ってフィギアや小アジアへ、他のあるものは海を渡ってクレタへと進行した。それらを除く、主なものがギリシア中を走り回るホメロスの作品に出てくるアカイア人であり、彼らはミノア文明の一部を崩壊し、一部を吸収して初期の新しい文化をギリシアの地に建設した。彼らは部族の長を中心とした生活をし、同族でありながら絶えず互いに戦争をし、主に富とされた家畜を放牧して生活する、じっとしておれない好戦的な種族であった。「民の馬使いと羊飼い」という名の下に族長は世襲的な権力によって支配していたが、戦闘的な武勇、優れた武技、体力などによって権力を支えていた。彼らは戦車で戦場に趣き、戦闘は常に族

長間の一騎打ちで雌雄を決した。そのような社会に於いて軍事訓練と身体訓練は如何なる少年にとっても重要な役割を演じ、またそれらは自然にレクリエーションとなり、イリアスの中でグラカスが「私の父は他人より抜き出よ、そして父祖の家名を汚がすな<sup>(1)</sup>」と述べるように、英雄達は戦地に於けると同様にスポーツに於いてもベストを尽くことが求められ、騎士道時代の馬上試合などの武術試合が生みだした精神はホメロスのギリシア人の間で行なわれた競技の中に生みだされている。

競技の精神が最も良く描かれ、競技者 Athleter という言葉が始めて出てくるのは、メロイ戦争後、幾多の苦難を経たオデュセウスがパエアケア人の土地に漂着し、アルキノオス王によって如何に懇に歓待されたかを生き生きした文章で述べるオデュセイアの第8巻<sup>(2)</sup>である。パエアケア人がどのような種族で、その場所はどこであったかは疑問とされているが、恐らくアカイア人ではないだろう。しかし、ここではそのようなことは問題ではない。ホメロスがスポーツを日常生活に不可欠なものとした引用節として価値がある。

アルキノオスは饗宴をもってオデュセウスをもてなしたけれど、苦難に疲れはてたオデュセウスはデモドコスの吟唱歌を聞きながら郷愁と回想に悲痛の涙を流す。この姿を見た王は気分転換のために「パエアケア人が競技に優れた巧みなことを伝えるように」といって競技会を催した。この賞品の出ない即興的な競技会にパエアケアの若者達は競走、跳躍、レスリング、ボグシング、円盤投などを全く楽しみのために行なうが、王子ラオダマスはオデュセウスの体格が立派なのは気付き「客人よ、こちらにお出で下さって、何か競技の覚えがおりならば、試合を致そうじゃありませんか。自分の手足で得た光栄よりも生ある限り人間にとって一層の光栄はないのですから。さあ、お出でなすって試合を致し、胸のお曇りをお払い下さい」と試合に誘う。しかし、オデュセウスは意外にも哀愁に溢れ、自分の悲運に胸が塞がれ、王子の挑戦を拒ぶ。そこで期待外れをした若いパエアケア人の一人が「お見外れました。客人よ、貴方は人間の間に広まっている数々の競技に覚えのある人でなく、撓座船であちこちらを漕ぎ回るとき、取引きする船人達の頭目や船荷に気を配り、本国産の荷を引き受けて、強欲の利得を収める人に等しい。貴方は競技者らしくない」と不作法な言葉を述べる。

「競技者らしくない」という言葉は不思議にも現代的な響きを持っている。我々は「彼はスポーツマンらしくない」という表現を何と多く耳にすることだろう。また若

(1) イリアス、6巻205行

(2) オデュセイア8巻97行

いパエアケア人のようなスポーツマンでない人々によってその言葉が何と頻繁に使用されることであろう。ホメロスは戦士達がすべて競技者であることを期待し、競技者は営利を否定し、最も名誉を重じる英雄として表わしている。従って、若者達は賞品のない即興な競技会に於いて競走、レスリング、ボクシングなどをただ楽しんでいるけれど、オデュセウスは嘲弄に苦悩し、ついに憤怒して立ち上がり、彼は誰よりも重い円盤を取りあげて遙か遠方に投げて「ボクシングであろうがレスリングであろうが競走であろうがかまわない。我と思う人は私の相手になるがよい」と挑戦の言葉を宣し、すべての競技に通じていることを自弁する。しかし挑戦者を求めながらも、「ラオダマス以外は」といって分別者たることを示している。実際、弓術に於いてピロクテテスを除けばアカイア人の中で最高の技術を持った彼であるが、ただ力量の優越を誇り、神々に挑戦して悲劇を生んだヘラクレスやヨウリトスのような真似をしないだけなのである。それをパエアケア人は十分に感じ取り、アルキノオスは若者の不作法を詫びて「我々はボクシングやレスリングでは完全でないけれど、足は速く、航海では第一番だ。常に我々が好むのは宴会に堅琴に踊りに種々の衣類に温かい風呂に愛に眠りだ」といって、踊りの演技を見せる。パエアケア人はアカイア人ではないことは明らかである。彼らはパエアケア人としての誇りを持っているにもかかわらず、競技者でない。

競技会ではどのような種目がどのように行なわれていたか、についてはイリアス・23巻パトロクロスに称えた葬送競技の記事にその模様が十分に描かれている。葬儀に競技を行なう習慣はエトルリア、コーカサス、アイルランド、シャム、北アメリカなどでも行なわれているが、ギリシアに於いてはギリシア歴史を通じて古くから絶えず行なわれている。イリアスの中で老人ネストールは青年時代にアマリュンセスの葬送競技に於いて優勝したことを思い起こし、ヤーソンの祖父にあたるペリアスの葬送競技はオリンピアで出土したキブセルスの箱とアミクラエで出土したアポロンの王冠の二つの名高い芸術作品に表わされている。また葬送競技の様子はフローレンスの有名なフランコスの壺やベルリンにあるアンピアサウスの壺（第1図）などの初期のものに多く描かれている。そのためにある死んだ英雄の栄誉の称えて競技会が行なわれたということがしばしば論じられ、ギリシアの大きな競技的な祭礼は葬儀を起源とすることが主張され、多くの著者達は競技会そのものに儀式的な意義を見出そうと努めている。しかし、ホメロスの作品の中にはその基盤となる儀式的示唆が与えられていないし、それを説明している箇所もない。ホメロスの描くスポーツは日常生活の一部としてであり、純粹に非宗教的なものである。兵士の招集、族長の結婚・葬儀などの部

族的な集まりに於いては集まった人達をもてなし、楽しませる何かの娯楽が必要であり、そのため、彼らは常に催し物を行ない、それは演劇、音楽、文学的なものを競演するということもあったが、大部分は競技的なものであった。葬儀の場合には故人の所有していた武器や所持品などを賞品の形で相続させることができるという特徴がある。パトロクロスの競技会でアキレスはすべての競技者達に賞品を与えている。

最初の競技種目は戦車競走である。これは競技者となっている族長達が馬を愛して北方から連れて来たのであるから当然のことであろう。ギリシアは元来、馬の産地ではなく、北方から連れて来た馬をテッサリー、アテッカ、アルゴス、エリスの原野で養育し、彼らは自分の持ち馬を誇りとしていたというのであるから、戦車競走は古くから行なわれていたと推定できよう。戦車は戦場では御者が制し、所有者がその側に立って戦い落馬させたけれど、競技会では所有者自身が戦車を操っていた。ネストールの回想に出てくる若き時代の戦車競走に使用された戦車は二頭立の戦車であるが、イリアスの中には祭礼に鼎を目当てに競走するために四匹の馬をエリスに送ったという四頭立の戦車の言及が一箇所<sup>(1)</sup>でてくる。この行は恐らくオリンピアの戦車競走を暗示させるために後代になって付加されたものであろう。

戦車競走にアキレスは五つの賞品——優勝者には手芸に長じた婦人と耳付鼎、二等の者にははらんでいる6歳馬、三等の者にはまだ火にかけていない立派な釜、四等の者には金の延棒二本、五等の者には執手付の杯を用意し、この五つの賞品はヨウメラス、デオメデス、メネラウス、メリオネス、アンテロコスによって争われ、競走は原野を横切って遙か遠方の標柱を左に回って出発点に戻って来るというものである。ネストールが自分の息子であるアンテロコスに「スピードよりも技術によって勝て」と激励し、特別に旋回点の回り方の忠告を与えると、白石をそえた枯木で印された標柱の側には審判官が立ち、五人の戦士達は抽籤の順序に従って一列に並び、一斉に馬の背中に鞭を当て出発する。旋回点はみな無事に通ったけれど、先頭に行くヨウメラスの戦車がこわれて、デオメデスが先頭にあがる。その後にメリオネスは狭い凹地なので車の出会いを避けようとしていたが、遠慮なく後のアンテロコスは追い越してしまう。観客の中にはイドメネスとアイアースのように賭をする者がいるが、ギリシア競技に於いて賭競技の例はこれが最初であり最後である。その内にデオメデスが先頭になって入って来たが、賞品を渡す時にアキレスは「一番優れた者がしんがりについて単つ蹄の馬を駆って来た」といって、二等の賞品をヨウメラスに与えようとすると、アンテロコスは異議申し立てをする。それを聞いたメリオネスは「アンテロコスよ、

(1) イリアス、第6巻・699行

私の馬を押し進めて、二等を得ようとは」というと、アキレスはそこでヨウメラに特別な賞を与えて事を収め、残った五等の賞品は「御老人よ、宝物をさし上げよう、パトロクロスの葬式の記念として」と老人ネストールに手渡した。ここで一等、二等の決定に悶着が起きているが、審判がいても決定する権利を持っているようである。つまり競技規則がまだ確立されておらず、審判官の権威もなく、競技は即興的で完全に組織化されていない。

次のボクシングとレスリングの二種目に非常に興味深いものがある。というのは、これらの力技は既に長い伝統を持ち、明確な競技規則の下で行なわれるまでに発達していたから、ちょうど日本の武士達によって行なわれた柔術のように、アカイア人は自分達の行なった技を後世に伝えている。ホメロスの描写は平易であるけれど、観察は鋭く巧みな表現によってこれらの競技模様をよくとらえている。ホメロスはこれらの競技の装飾語として戦闘場面に用いる形容詞苦しく骨の折れるという語を付加しているが、スポーツにせよ、戦争にせよ、争うことは苦しく骨の折れるものである。しかし、ホメロスの戦士達はこの競技の中に楽しみを見出していることが感じられ、ギリシア人の間では何時の時代でも異常なほど人気がある。

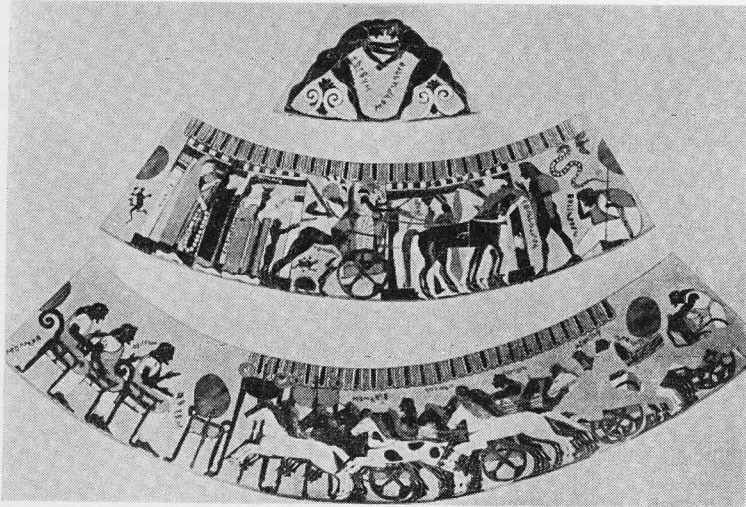
ボクシングのためにアキレスは勝者は6歳の騾馬と敗者に両耳付の酒杯を賞品として提供すると、すぐにエペイオスが前に進み出て自信満々と自分の勝利を公言した。彼の挑戦者はテーベのオイデープスの葬送競技に於いてあらゆる相手を打ち倒した昔の選手権の息子であるエウリュアロスになった。グローブはクレタの情景に出てくるようなカエスタスではなく、ギリシア初期の壺に描かれているようなもので、正確にはBC5世紀にギリシアのボクサー達が使用した細長い牛皮の紐に似た二本の紐と肢帯を両手に巻きつけ、両手を上げて彼らはなぐり合いを始めるが、優美に描くノック・アウトのシーンと最後の場面しか記述されていない。「勇ましいエペイオスが躍りかかって様子をうかがう相手の頬げたを打つと長くはこらえていられず、どっとばかり見事な手足はくずれ倒れた。さながら北風に荒れる波の間で、魚どもが藻草の多い岸に跳ね上がり、それを黒い怒濤がたちまち呑み込む、そのような彼は撃たれて跳ね上がった。が気象の大きなエペイオスは両腕で彼を抱えて起してやった。彼のまわりを親しい友人たちが取り囲んで両足を引きずりながら人の輪の中から連れ出したが、彼はべっとりした血を口から吐き、首を片方に傾けたきりで意識も朦朧としていた。」負かした相手に対するエペイオスの思いやりは特に「相手の肌えを破り、骨をくだいてやる」と試合の前に自慢した箇所とは対照的にほれぼれするような筆力がある。敗者に対するこの思いやりは後のギリシア人の間でも絶対に見ることができない。

オデュセイアの中には素手で闘った模様がなお一層生き生きと描かれているが、<sup>(1)</sup>それはアカイア人がどのようなボクシングの技術を持っていたかを知るのに都合が良い。乞食に変装して郷里に戻って来たオデュセウスは自分の館の前で自分を追い返えそうと無礼を働き「お前の胸と唇とを血まみれにしてやる」とおどすイーロスという乞食に会う。けんかをふと耳にした従者達はボクシングについて何も知らないと見える二人の乞食がなぐり合いするのを期待して「こりゃァ前代未聞だ、神様もこの館にこれは面白いことを下されたものだ」と喜び、彼らはいどみ合っている二人に「脂身と血を詰めた山羊の胃の腑を勝者にあげよう」と嗾けた。それで二人は自分のぼろ着を締め直したが、オデュセウスがぼろ着を腰のまわりにたくし上げたとき、オデュセウスの立派な太い腿と広い肩、逞しく力強い腕が見えた。イーロスの心は臆病風に吹かれたが、召使い達は無理矢理かれの着物をたくしあげ、こわがっている彼を真中に突き出し、二人は手を高くあげた。闘いの結果は予め分かっていた。オデュセウスはその場で打ち倒して殺してやろうか、それとも軽く打って地べたにのばしてやろうかと思案したが、素姓を見破られないように軽く打つのが得策だと思った。イーロスは相手の右肩を打ったが、オデュセウスは耳の下の頸を打ちつけると、口から真赤な血が出て、イーロスは気を失い塵の中に倒れ、足で地を蹴りながら歯を食いしばった。詩人は正確な知識をもって描写し、明らかに多くの闘いを見ているもようである。

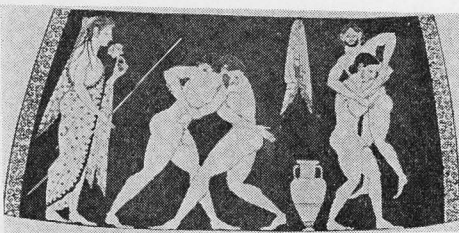
再び、アキレスはレスリングの賞品として12匹の牛に相当する大きな三脚鼎と4匹の牛に値する手技に堪能な女性を用意した。これには知恵に富み利益を徼りオデュセウスとアイアースが名のりをあげ、この試合は互いに相手を地面に投げようとする立技のレスリング規則で行なわれた。二人はしたくして競技場の真中へと進み出て、互いに相手を頑丈な手で抱きかかえ「棟の梁のように」(第1図)がっきと組んだ。すると互いの背筋はきしみ立て大胆な腕につかまれ、しっかりと抑え込まれて、汗はたらたらと流れ落ち、脇腹にも両肩にもみみず腫れが真赤に腫れ上がったが、二人は終始力んで、勝利を得ようと気負いたった。ついに観客が飽きてきたとき、アイアースは「オデュセウスよ、私を持ち上げてみよ、それとも私が持ち上げるか」といって持ち上げようとしたが、オデュセウスは術策を忘れずに後方からアイアースのひかがみを狙って打ちつけると、仰むけにひっくり返えり、その胸の上にオデュセウスも倒れた。二人とも倒れたので、勝負がつかず、次にオデュセウスが巨体の相手を持ち上げようとして地面から少しばかり動かしたが、持ち上げるにはいたらなかったので、足ががらみを掛けた(第2、3図)。すると二人とも地面にどっと落ち、またもや勝負はつ

(1) オデュセイア、8巻、15行





第1図 アムピアラウスのBC 6 黒絵壺、世紀前期後半、ベルリン博物館、1955  
上段—ペレウスとヒッパルクスのレスリング  
中段—アムピアラウスの出発  
下段—戦争競走、左側には3人の審判官が座り、その前には賞品の三脚鼎が置いてあり、6人の御者が競走している。



←第2図 レスリングの練習 BC 530 年頃のアテッカ赤絵壺、ベルリン博物館、2159

左手の者は青年トレーナーのようである。真中にはひげをはやした競技者が背負投の取り方をしているが、相手は右に動き、右手肘下を取って攻撃を阻止している。

右側の青年は身体を抱込んで相手を持ち上げている。持ち上げられた相手は右足を彼のひかがみにびったりと合わせながら、彼の腕をはずそうとしている。



第3図 体の巻抱え、BC 6 世紀中朝のアテッカ黒絵壺ミュヘン古代陳列館、1461

左手の組は背後からの体の巻抱えを表わしている。持ち上げられた者は相手の右足の内側に右足を掛けた正規の型で防禦している。

かなかった。再び二人が組合おうとしたとき、アキレスはもう組合いはやめるがいい。両方とも勝ったのだ」といって、二人に同じ賞品を与えた。

次は競走で、コースは戦車競走と同じように遠方の標柱を回って、犠牲に殺した牛の血が滲む火葬の薪置場付近の出发点に戻って来るというものである。これには三つ



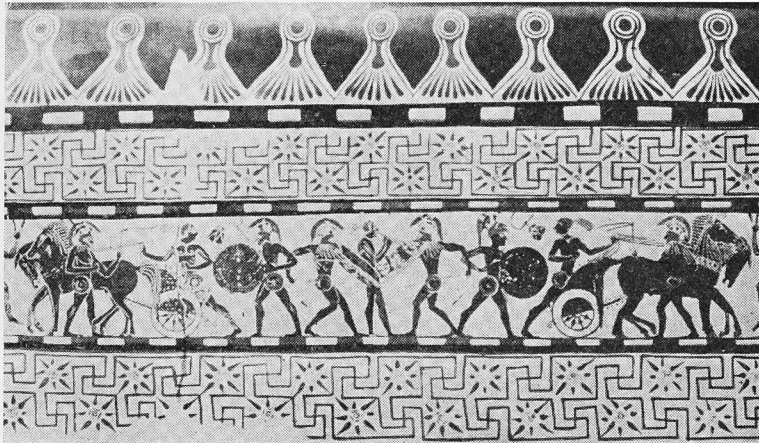
の賞品が置かれ、オーイレウスの子アイアース、オデュセウス、青年アンテロコスが出場した。決勝点の近くまで、アイアースの背後にぴったりとついてオデュセウスが走っていたが、オデュセウスがアテーネーの女神に祈ると、女神は彼の手足を、両足も、両手も軽やかにしたと、ホメロスはラスト・スパートの模様を愉快地に記述している。しかし、この正しい支援だけでは満足しなかったアテーネーは犠牲の血で走るアイアースの足を滑らせた。牛の汚物がアイアースの口にも鼻にもいっぱいつまったのを見たアカイアの人達は笑ったが、別に悪い感情は持っていない。彼はただ「女神が私の足を遅せた」と註釈し、最後に走って来たアンテロコスは「親しい方々、承知のように相変らず不死の神様方は古い時代の人間ほど大切になさるのです」と慰めている。

ここで競技会に関する原文の記事は終わりであろうといわれるけれど、恐らく巻末に出てくる槍投の試合も原イリアスに属するものと思われ、競技はまだ終わっていない。アガメムーンが競技者の一人になるので、アキレスは「われわれ皆は力に於いても投げ技でも第一人者であることはよく承知している」といって、試合を無用として彼に一等の賞品を与えている。槍投と競走の間に介在する文章は後代の挿入句として最も代表的に批判され、表現に於いても活気がなく、文体は本文全体に比するとかなり劣っている。その中には武装槍試合、砲丸投、弓術の三種目が述べられている。

最初の場面にデオメデスとアイアースの間で行なわれた武装試合が描かれているが、アキレスは「どちらでも先に腕を伸ばし、はらわたに触れ、黒い血を流させた者に私はこの銀金具を打った剣を贈るとしよう」といっているから、殺人的な形式のスポーツのようである。彼は「二人のために立派な御馳走を陣屋の中に用意させよ」といっているから、危険で致命的な結果を期待していない。また実際に派手な演技の後でデオメデスが腹を立ててアイアースの喉を絶えず刺そうとしたとき、観客はアイアースのために心配して試合を中止させている。

このような試合はギリシアのスポーツ精神とは全く違うから、この競技の挿入は注目すべきものがある。この競技はジムナジオンでも行なわれていないし、また如何なる意欲的な祭礼でも見出すことはできない。後代になって今日のフェシングや銃剣術競技のように武器を用いても怪我しないようにして闘うホプロマシア Hoplomachia という競技がジムナジオンでポプロマコスという専門指導者によって教えられたが、このポプロマシアとこの危険な闘いを混同しはならない。ホメロスの詩の中にこの競技を挿入するには伝統的な背景があるか、あるいは実際に行なわれていなければならぬ。この武器を持った格闘はスポーツ形式として認められないけれど、それは故人となった戦士の霊を当然慰めるものと見なされた血液の献納、つまりパトロクロスの

葬儀に於いてアキレスの実際に捧げた人間の犠牲に代わるものとして行なわれたと思われる。そのような試合はエトルリアの葬祭競技の特徴であり、これからローマ人の剣闘士競技が発達したのである。ギリシアの地ではクラゾメラエから発掘されたBC 5世紀の石棺<sup>(1)</sup>にその葬祭競技の様子が描かれている。ここには戦車競走の準備をしている御者達の間で二本笛の伴奏と共に闘う槍と楯を持った一組の戦士を見ることができる。またBC 8世紀のデピュロンの壺にも葬祭競技として武技試合が描かれているし、さらにそのような風習は4世紀まで存在していたことが「ボエオテアから戻ったカスサンメロスは王女とヨウリデセの母キュンナを埋葬して色々な行事の中に武技試合を行なった」というアテナエウスの記事<sup>(3)</sup>からも知ることができる。プルタルコス<sup>(4)</sup>は武技試合がかってオリンピアで行なわれていたことを示唆し、また彼の意見はオリンピア競技の起源を葬儀に求める論議に使用されているけれど、彼自身もその示唆に対してほとんど確信を持っていないようである。



第4図 武装槍試合（クラゾメラエ出土の石棺）、BC 5世紀初頭 英国博物館、  
両端の戦車は競走の準備をし、真中の2人の戦士はヘルメットをかぶり、  
槍と楯をもって闘っている。

ホメロスの詩の中で最も人気のあった娯楽は円盤投である。オデュセウスはパエアケア人が投げようとしたものより、一層重い円盤を投げて自分の力を立証したし、ヘネローペの求婚者達はオデュセウスの館の前の平らに滑した場所で円盤と狩に使う槍

(1) 表示されている光景は斗いではなく、武装したダンスの場面である。

(2) Greek Athletics 第4図を参照のこと。

(3) Athenaeus, iv. 155 アテナエウスの長い武技試合の講話はこの問題上ほとんど関係がない。

(4) Quest. Symp. v,2

を投げて楽しんでいる。<sup>(1)</sup> またアキレスが不機嫌になって自分の陣にしけこんでいたとき、「彼の兵士達は円盤を投げたり、細身の槍をほうったり、矢を射ったりして慰んだ<sup>(2)</sup>」というように、円盤投は兵士達の娯楽になっていた。ホメロスは我々が距離を概測する手段としてちょうど「石を投げて届く距離」と用いるように「円盤を投げて届く距離」という言葉を用いているから円盤投は非常に通俗化していたスポーツである。しかし、円盤 Diskos とはどのような意味を持つものであろうか。ホメロスは後代になってジムナジオンで使用された人工的な円盤のつもりで述べているのではないし、パエアケア人のアゴラ（広場）やトロイの戦場に色々な大きさのそうした用具が備えてあったとは想像できない。円盤 Diskos という語は単に投げるためのものを意味し、投げるに便利な自然の物、特に石などを意味する言葉として使われていた。ギリシアは石の産地であり、石は自然に戦争の武器となり、投げる技術や力を自然に試めず機会をギリシア人に提供した。戦場でホメロスの戦士達は「一生涯二度と持ち上げられないような盤石を投げた」というし、普通の兵士達が戦うときでも、石がどんどんと飛んできた。パエアケア人のアゴラで使われた円盤は、魚夫達が網や釣具などを干すのに用いた波打ち際の平らな石か、小舟をつなぐ石であったとも想像できる。オデュセウスが投げた円盤は石であったけれど、パトロクロスの競技会で投げたものは垣塙から出たままの鉄塊 Solos<sup>(3)</sup>として述べられている。この鉄塊は恐らく地中海世界に一般的に見られる露天のかまどから産したもので、投げものであるだけでなく、賞品になっている。これは昔、力の強いエーエチオンが投げていたものを、アキレスが彼を殺してこの塊りを他の財宝と一緒に船に積み込んできたもので、アキレスがいうように「これを得たものは羊飼にせよ、百姓にせよ、五年間はこれで十分に足りる」<sup>(4)</sup>というものである。しかし、この重さにもかかわらず、勝者は「牛飼いがほうり杖を飛ばして、その杖が旋回しながら、牛の群れの間を飛びぬけてゆく」それほどまでも遠方に投げている。

石や弓は貴族の武器ではなく、それは一般の兵士の武器で、戦争というより狩猟に使用された。このため、弓はイリアスよりもオデュセイアの中では一層高らかに謳いあげられている。イリアスの中ではオデュセウスは弓師ではなく、有名な槍師として描かれている。一般に弓嫌悪し矢をあなどったアカイア人は矢を恐れたからといって

(1) オデュセイア、4巻、626、17巻168行

(2) イリアス、2巻774行

(3) イリアス、23巻、826、839行

(4) ほうり杖 bola—Kalauirops の意味であろうといわれる。

## ホメロスの競技

も、臆病であるとか、勇敢であるとは区別していない。BC 5 世紀の重装備歩兵達にも同じ感情がある。従って、エフェボイ訓練や地方的な祭礼に弓術はあったけれど、大きな祭典競技のプログラムには現われていない。イリアスの弓競技の記事は第一位の者に10個の両刃斧、第二位の者に10個の片刃斧が賞品として置かれ、鳩の足に細い糸を結って飛ばし、「それを帆柱に結んで飛び回る鳩を射った者に第一の賞品を、また糸にあてた者には片刃の斧をあげよう」と非常に架空的で、オデュッセイアの記事を回顧しているとも考えられ、全く馬鹿げている。

## 結 語

ホメロスに述べられている競技会には何時でも試合を楽しむという真の競技精神が常に描かれているが、ホメロスのスポーツは歴史時代のギリシア人のスポーツから比べると、かなり隔たりがある。第一に、すでに見たように従者達は彼ら自身のレクリエーションを持っていたけれど、それらはホメロスの社会全体と同じく貴族的なものであり、族長のみが技を争い、主な種目は戦車競争、ボクシング、レスリングで貴族の占有物のようなものであった。第二に、スポーツは形式的でなく、即興的なところが多く、組織的なトレーニングは行なわれていないし、また競技自体は組織化されていない。

## 参 考 文 献

1. 高津春繁「ホメロスの英雄叙事詩」岩波新書 615, 1966年
2. 藤井義夫「ギリシアの古典」中央新書 102, 昭和41年
3. 藤縄謙三「ホメロスの世界」至誠堂新書24 昭和40年
4. 和辻哲郎「ホメロス批判」要書房 昭和21年
5. M.I. Finley 「The World of Odysseus」Penguin Books, 1956.

(本学助手・体育学)